

# 書評 *Spatial Ecologies: Urban Sites, State and World-Space in French Cultural Theory* (Verena A. Conley, Liverpool University Press, 2012)

山 本 千 寛

1980 年、人文地理学者エドワード・ソジャが「社会—空間弁証法」においてアンリ・ルフェーヴルの空間論を再評価しながら「時間」の主題と同時に「空間」に着目する重要性を示した。これと時期を前後して、人文地理学を中心に「空間論的転回」が学際的な広がりを見せはじめる<sup>1</sup>。2000 年代には社会理論やカルチュラル・スタディーズのみならず、宗教研究や文学研究などにおける具体的な空間の分析方法を一望する学際的な著作が刊行され、日本でも空間論的転回の受容の動向を振り返りつつその源泉のひとつとなったソジャの議論を再検討する加藤政洋の論考が刊行された<sup>2</sup>。

しかし、空間の理論化において重要な参照先となってきた思想家たちの議論については、個別的研究は存在するものの、特定の視点から複数の思想家を一望するような研究は長らく提示されてこなかった。この点で批判・文化理論研究者ヴェレナ・A・コンリーによる本書は大きな貢献をなしている。著者は批判的な空間概念の練りあげに貢献した 20 世紀後半のフランスの理論家たち（アンリ・ルフェーヴル、ミシェル・ド・セルトー、ジャン・ボードリヤール、マルク・オジェ、ポール・ヴィリリオ、ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ、ブリュノ・ラトゥール、エティエンヌ・バリバル）に 8 つの章で立ち返りながら来たるべき「未来の諸空間」の可能性を論じている。本書の成り立ちについては *Progress in Human Geography* 誌に掲載された書評への応答記事に詳しい。これによれば著者は人文地理学者デヴィッド・ハーヴェイのユートピア的な「希望の空間」や本書 8 章で論じられるバリバルの空間のフィクション——すなわち「無意識と、経験に由来するある現実の構築とが交差するところで生産されるもの」——への共感を動機にしている<sup>3</sup>。

こうした展望を備えた本書を貫くのは「なかに住まうこと [inhabiting]」をめぐる問いであり、これは主題の「エコロジー」の語に象徴的に表わされている<sup>4</sup>。著者はガタリの『3つのエコロジー』におけるエコロジー概念を「人びとや動物たちといった他者や、環境とのやりとりの仕方」を表わすものと解釈し、これを

このエコロジー概念がひとびとが太古から夢中になってきた「なかに住まうことの問題、在ることや存在することの問題」に結びついている点を強調する<sup>5</sup>。

以下、本書の構成にしたがって内容を概観する。

「住みよくすること [making habitable] の意味は著者ごとに異なるが、その表現はつねに世界における実存的なあり方や生き方を説いている」(p. 7) という認識のうえで、著者は本書第1章を「疎外されていない」(p. 7) という意味での住みよさを志向するルフェーヴルの議論の検討から始める。「生きられたもの」の概念に着目して『日常生活批判序説』を『空間の生産』の「序曲」(p. 13) と位置づける点は空間の問題の端緒に日常生活の問いがすでに控えていることをよく示している。ルフェーヴルの議論を補完するために第2章ではセルトーの日常空間の議論が取り上げられる。とくに著者はセルトーが人びとの「移動」に着目する点を評価する。移民が受入れ国において空間を「知覚し、占拠し、作り上げる」ことが——敵対的な出会いに至る危険を含みつつも——「生産的な衝突となることで、それ以前の国民国家における均質化していくようなフィクションが可視化される」(p. 42) とセルトーは論じている。

この裏面で進行したメディアの空間の拡大と資本主義の問題に着目したのが第3章で論じられるボードリヤールである。ボードリヤールはヨーロッパの空間との比較で、アメリカの幾何学的な空間編成を問題視した。すなわち「アメリカは空間の語で思考されるべきだが、しかしそれは実存在的な領域ではない。[…] アメリカでは、人びとは日常生活に逃げ込むこともなければ、日常生活に居住やハビトゥスの感覚を見出すこともない」(p. 60)。しかし著者によれば、ボードリヤールは西欧のアメリカ化等の重要な問題提起をしながらも、空間の「エコロジカルな側面をけっして発展させなかった」(p. 61)。これを補うものとして著者はセルトーの学生でもあったオジェの「非一場所」論を第4章で接続する。場所を「空間的で(関係を持ち)、時間的(歴史的)で、アイデンティティ(個人)に結びついた」ものとする、「非一場所」は空港やショッピングモールのように「社会的関係が不在」の空間や、地下鉄や高速道路のように「流動性がある、束の間の」(p. 71) 空間を指す。「非一場所」においてひとは「アイデンティティや実存在的な関係[…]を奪われたひとりぼっちの個人」となるが、まさにそこで「新たな場所が再構成され、新たな関係が形成される」(p. 71) という論理で、オジェは実存在的な住みよい空間の可能性を論じている。

空間論のひとつの画期として著者が評価するのがヴィリリオの『臨界＝危険空

間『*L'espace critique*』(1984年)と同名のシリーズである<sup>6</sup>。第5章で取り上げられるヴィリリオは、資本主義と軍事的発明の関係に着目しつつ「輸送と情報における革命がいかにわれわれの世界との関係を変えているのか」、「伝統的な政治と文化が速度の効果の元でいかに力を失っているのか」(pp. 90-91)と問題提起した。重要なのは「速度のテクノロジー」に管理されることなく「それに助けられた世界で」(p. 93)実存的領域の可能性を探ることである。このヴィリリオが自身の速度への関心に重ねたのがドゥルーズ／ガタリのノマドロジー概念だ。第6章で著者はこのふたりの著作に依拠しながら「オルタナティヴな地図をつくる」リゾーム的な思考と平滑空間の概念を紹介する。すなわち「一時的にあつまり、ある場所を占拠し、また移動する人びと」のノマドの土地があるとすれば、それは「かれらの活動を制限し、格子状の構成にプロットするような境界線にひもづける」(pp. 100-101)条理空間でなく平滑空間であると著者は整理する。ノマドの過程自体が資本主義に絡め取られうることには留意しながら、著者は管理社会以後の「エロジカルなミクロ空間」の可能性を探るために、彼らの「理論的道具が絶えず調整されて再構成される」(p. 111)必要性があると説いている。

上述のテクノロジーの問題に関して「機械がトップダウン的にわれわれを支配している」という言説を批判したのが第7章で論じられるラトゥールである。ラトゥールにとっての喫緊の課題は「人びとが協同してコモン・スペースを創造する方法」(p. 112)の提示であった。「コスモポリティクス」という新しい政治をめざしてひとものをも含めた様々なネットワークにしたがった交渉が行なわれるような「アクター」の考え方が重要であって、これらの交渉の交点にコモン・スペースとしての世界空間が現れうることが説かれている。最後に第8章で紹介されるバリバールはセルトーと同様に「移動」に着目しつつ、フランスの移民が「公開討論会でなにかを配布したり発言したりすることへの権利をも含む、住まうことへの権利を求めている」(p. 140)として民主的な公共空間の必要性を強調する。バリバールはエコロジカルな空間の創造主体を「もはや国家を妨げるのではなく、活動的に、市民として、その国家を取り囲み、また国家の表面を交差しているような目に見える境界や不可視の境界を無効にする」(p. 143)ような者と捉えて、国民国家の空間に対立するという本書前半の思想家たちの構図をより広い視野へと引き延ばしている。

以上が本書の概要である。本書にはミシェル・フーコーやピエール・ブルデュー、ジャック・ランシエールといった重要な空間の思想家が取り上げられて

いないが、丁寧な註によって各論点と様々な思想家あるいは文学とのつながりが補足的に指摘されている。「住みよい」空間をどのようなものとして捉えて、そのために必要なことはなにかと考える本書における8つの連関する思考の軌跡は単なる思想史上の参照にとどまらず、読者を各思想家のテキストへと導き、われわれの「空間」への眼差しを変容させる可能性をも秘めているといえるだろう。

## 注

- 1 Soja, Edward W. (1980) “The Socio-spatial Dialectic” in *Annals of the Association of American Geographers*, Volume 70, Issue 2, pp. 207-225.
- 2 以下の著作を参照。Warf, Barney and Arias, Santa (2008) *The Spatial Turn: Interdisciplinary Perspectives*, New York : Routledge. ならびに、加藤政洋 (2004) 「エドワード・ソジャとポストモダンの転回」『都市文化研究 (3)』、166-181 頁。
- 3 Conley, Verena A. (2014) “Author’s Response: Spatial Ecologies – From Habit to Habitus” in *Progress in Human Geography*, Volume 38, Issue 1 (pp. 166-169), p. 167.
- 4 ここではエコロジー概念とのつながりを強調するために語源に忠実に訳出した。
- 5 *Ibid.* p. 168.
- 6 *Ibid.* p. 166.